

指導力の向上をめざした研修のさらなる充実を図るために

- 若手教員の意識からみた研修ニーズ -

西田 晋

本研究では、今後、若手教員が増えていく現状を踏まえ、採用2・3年目の京都市立小・中学校の教員を対象に、研修に対するニーズを把握するためのアンケート調査を実施した。そして、研修内容の工夫・改善を図るための基礎資料を作成するとともに、分析結果を踏まえ若干の提言を行うこととした。

第1章 教員研修に求められるもの

めまぐるしく変わる社会状況や新しい教育課題への対応を進めるために、最新の専門的知識や指導技術などを幅広く身につけていくことが教員に求められている。そのためには、まず校内の研修・研究体制の確立とその充実に向けて積極的に取り組む必要がある。また、校内研究・研修を核としながら、教育委員会が実施する研修や支部研修など、校外における研修内容の充実に向けて取り組む必要がある。そこで、とりわけ若手教員が、優れた実践事例と出会い、より多くの指導方法や技術などを習得し、指導力の向上を図ることができるように、研修内容の工夫・改善に資する基礎資料を作成したいと考えた。

< 調査名称 >

若手教員の研修ニーズに関する調査

< 調査目的 >

本調査は、現行の研修内容や研修手法の工夫・改善を図るための基礎資料を作成するために、若手教員の研修ニーズを把握する目的で行う。

< 調査対象 >

小学校・中学校に勤務する採用2・3年目の教員。ただし、本市採用前に他都市現職教員であった者については調査対象から外している。

< 調査時期 >

平成21年7月7日（火）～7月15日（水）

< 調査人数 >

対象者数及び有効回答数を、表1に示す。

表1 対象者数及び有効回答数

	小学校	中学校	計
対象校	147校	65校	212校
対象者数	310人	148人	458人
有効回答数	228人	105人	333人

< 調査構造 >

質問紙の作成に当たっては、研修ニーズを「役立ち感」「必要感」「困りや悩み」から把握することができるように調査の構造を考え、項目を設定した。また、カリキュラム開発支援センターの設備面・条件面からの要望を把握できるようにした。

第2章 若手教員の指導力向上を支えるもの

満足度からみた若手教員の意識

[学習指導][学級経営][生徒指導][家庭・地域との連携]の観点から把握した。両校種の数値に若干の差はあるものの、満足であると肯定的な回答をした割合は平均的に見ても三割前後であった。

それに対して、それぞれ八割を超える割合で、困りや悩みが多かった旨の回答が認められた。

指導力を高めるために役立つ「場」

小・中学校とも、「先輩や同僚との話し合いの場」の役立ち感に対して、「かなり（まあ）そう思う」と回答した割合が高かった。

受けたい研修テーマ

36項目の研修テーマを例示し、優先的に受けたいテーマを七つ選択することを求めた。

小・中学校とも「教科指導」の選択数が最も多かった。その他、選択数が多かったテーマには「学級経営」「生徒指導」「道徳教育」があった。

表2 受けたい研修テーマ

* 校種別に選択数の多かったテーマについて上位10項目を表示

	小学校 (件)	中学校 (件)
① 教科指導	205	教科指導 86
② 学級経営	182	道徳教育 72
③ 生徒指導	125	学級経営 67
④ 道徳教育	92	生徒指導 63
⑤ 総合育成支援教育	90	いじめ・不登校 38
⑥ 学習評価	81	進路指導 38
⑦ 保護者対応	78	人権教育 34
⑧ 授業研究の進め方	74	教育相談・カウンセリング 32
⑨ 小学校英語活動	69	コーチング 29
⑩ いじめ・不登校	58	保護者対応 28

自由記述からみた役立ち感の高い研修

これまで受けてきた研修で、役立ち感が高かったと感じている研修内容を自由記述によって求めた。両校種とも「教科指導」に関する記述が多く見られた。小学校では、授業を“参観”“公開”した際の記述や、校内研修の場が役立ったと回答した数が高かった。中学校では、授業の“参観”“公開”に加えて“校外で行われる”“各教科に特化した指導講座”や「道徳」に関する記述が多かった。

第3章 若手教員が求めているもの

学習指導に関する内容

優先的に受けたい内容を例示した12項目から五つ選択することを求めた。校種別に選択数の多い順に並べると、表3のようにまとめられる。

表3 学習指導に関して優先的に受けたい研修内容

	小学校	(件)	中学校	(件)
①	発問, 指示	169	学習意欲	71
②	学習意欲	140	発問, 指示	69
③	ノート指導	121	教具	63
④	教材研究	109	教材研究	53
⑤	板書	105	話し合い	51
⑥	話し合い	103	指導形態	43
⑦	学習規律	96	学習規律	41
⑧	教具	88	板書	34
⑨	発達段階	64	学習評価	24
⑩	指導形態	57	ノート指導	24
⑪	学習評価	42	発達段階	17
⑫	学習指導案	10	学習指導案	16
	計	1104	計	506

困りや悩みを解決するために、何月頃にどのような内容の研修があれば役立ったと思うのかを自由記述により求めた。小学校では、「学習規律」「発問, 指示」「教材研究」に関する内容を求める意見が多くあり、特に4月に「学習規律」に関する内容があれば役立ったとする意見が多かった。中学校では、「学習評価」「教材研究」に関する内容を求める意見が多くあり、4月に「学習評価」に関する内容があれば役立ったとする意見が多かった。

学級経営に関する内容

学級経営に関して困ったり悩んだりしたことについて7項目を例示し、各項目について、その意識の度合いについて尋ねた。「たくさん(まあ)あった」と回答した割合合計を高い順に並べると、表4のようにまとめられる。

小・中学校とも「人間関係作り」に関する内容で最も困りや悩みが多かったことがうかがえる。

表4 学級経営に関する困りや悩み

	小学校	割合(%)	中学校	割合(%)
①	人間関係作り	82.0%	人間関係作り	68.5%
②	学習ルール	78.1%	学習ルール	61.9%
③	日常的な活動	70.2%	学級開き	59.0%
④	学級開き	67.5%	日常的な活動	57.2%
⑤	教室環境	57.5%	教室環境	42.9%
⑥	年間計画	51.8%	学級目標	38.1%
⑦	学級目標	45.2%	年間計画	34.3%

困りや悩みを解決するために、何月頃にどのような内容の研修があれば役立ったと思うのかを自由記述により求めた。小学校では、「学習ルール」「学級開き」「人間関係作り」「日常的な活動」に関する内容の研修が年度当初にあれば役立ったと

いう意見が多かった。中学校では、「学級開き」「人間関係作り」「学習ルール」に関する内容の研修が、年度当初や3月にあれば役立ったとする記述が多かった。

「あなたはどのような研修があればいいと思いますか。」(自由記述より)

小・中学校とも「多くの実践を見て学び取る研修」を望む声があり、特に先輩教員の実践や事例にできるだけ多く触れたいという記述が多かった。

研修形態については、少人数で実践を交流する研修や、すぐに活用できる内容や実技を伴う研修を望む記述が多かった。

第4章 分析を終えて

各学校でどのような工夫や、体制・システム作りができるのか、分析結果を踏まえつつ、改めて見直したい三つの視点を提案した。いずれも各学校の実践や取組をはじめとする“財産”をいかにすれば目に見える形で蓄積し、共有することができるのかを念頭においたものである。

互いの授業の良さを共有するための工夫

学習指導案略案を活用した公開授業実施の推進
互いの学級経営の進め方を共有するための工夫
実践をテーマごとにまとめ、冊子化すること
校務遂行の手順を共有するための工夫

校務分掌ごとに手順を記録し、共有すること

また、校内外の研修運営の際、意見交換や協議会の工夫として、“LQ型からLO型の交流”を進めることを提案した。LQ型(Learning&Question型)の交流とは、講義や公開授業の内容に対して質問をすることが主体となる協議会である。それに対し、LO型(Learning&Open型)の交流とは、授業や講義を通して「学んだこと」を、自分の率直な思いとして「発信し合う」スタイルの協議会である。

研修の場で参加者自身が自分の思いを表現し、話し合いを通して出会った新しい価値観や自分とは違う物の見方を吸収し合うことは、教員として“学び続ける姿勢”を培い、確かな力量を必ず向上させるものになると考える。

LQ型の交流(Learning&Question型)

⇒授業や講義内容に対して、質問をする。

例) 司会: 何か質問はありませんか?

参加者: ○○について質問します。

LO型の交流(Learning&Open型)

⇒授業や講義内容から学んだことを基に交流する。

例) 司会: 提案(授業)について、皆さんが学んだことや参考になったことについてお話をしてください。

参加者: 学んだことは～です。

参加者: 今の感想を聞いて、～と思いました。

例) 司会: 皆さんが実践していることや工夫していることを紹介してください。

参加者: 私は～の実践をしています。